需給動向

国内の畜産物の需給動向

牛　肉

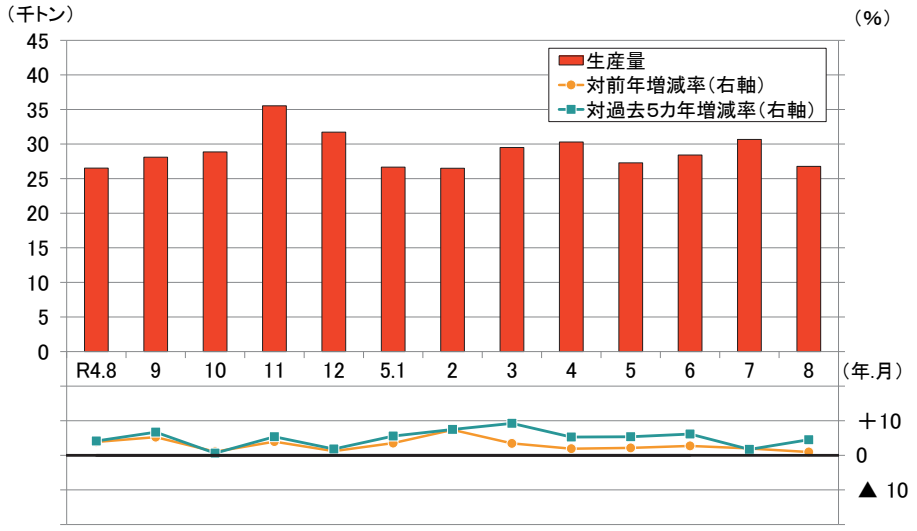
５年８月の牛肉生産量、前年同月比1.0%増

生産量

令和５年８月の牛肉生産量は、２万6782トン（前年同月比1.0%増）と前年同月をわずかに上回った（図１）。品種別では、和牛は１万2402トン（同3.1％増）、交雑種は7320トン（同4.1％増）と、いずれも前年同月をやや上回った一方、乳用種は6758トン（同4.9%減）と前年同月をやや下回った。

なお、過去５カ年の８月の平均生産量との比較では、4.5%増とやや上回る結果となった。

図１　牛肉生産量の推移



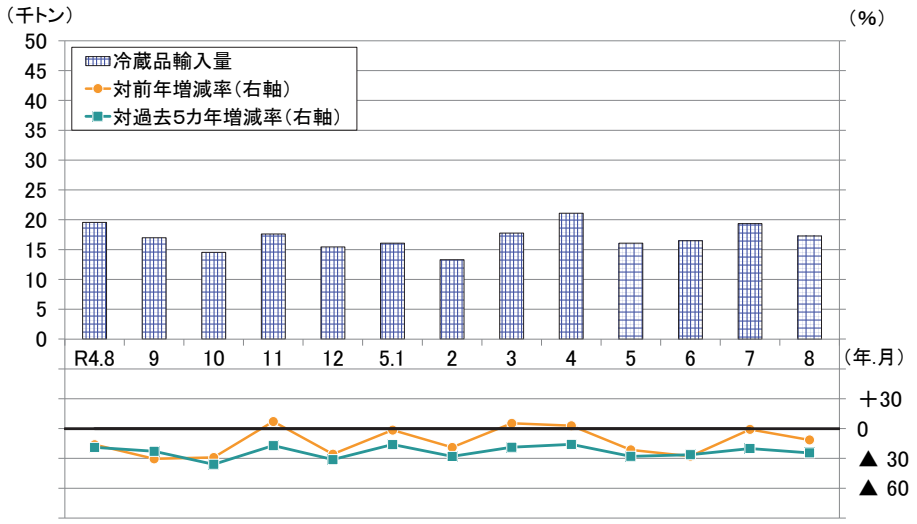
資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

輸入量

８月の輸入量は、冷蔵品は、国内需要の低迷の他、米国産輸入量が現地相場の高騰もあり少なかったことなどから、１万7308トン（同11.5%減）と前年同月をかなり大きく下回った（図２）。冷凍品も、国内の輸入品在庫量が多く、米国産およびカナダ産輸入量が現地相場の高騰もあり少なかったことなどから、２万8333トン（同16.4%減）と前年同月を大幅に下回った（図３）。この結果、全体でも４万5668トン（同14.6%減）と前年同月をかなり大きく下回った。

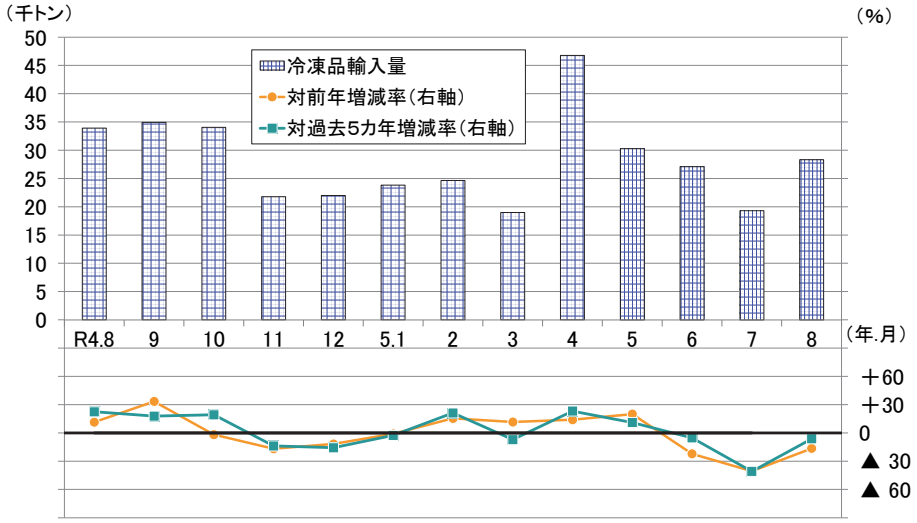
なお、過去５カ年の８月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は24.5%減と大幅に、冷凍品は6.2%減とかなりの程度、いずれも下回る結果となった。

図２　冷蔵牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
　注：部分肉ベース。

図３　冷凍牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
　注：部分肉ベース。

家計消費量等

８月の牛肉の家計消費量（全国１人当たり）は179グラム（同2.3%増）と前年同月をわずかに上回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去５カ年の８月の平均消費量との比較では、8.4%減とかなりの程度下回る結果となった。

８月の外食産業全体の売上高は、新型コロナウイルス感染症（COVID－19）の５類移行後の初めての夏休みシーズンとなり、旅行やお盆の帰省などで人流回復がさらに進んだことなどから、前年同月比16.6%増と前年同月を大幅に上回った（一般社団法人日本フードサービス協会「外食産業市場動向調査」）。このうち、食肉の取り扱いが多いとされる業態では、ハンバーガー店を含むファーストフードの洋風は、恒例の季節商品が好調であったことなどから、同9.0%増と前年同月をかなりの程度上回った。また、牛丼店

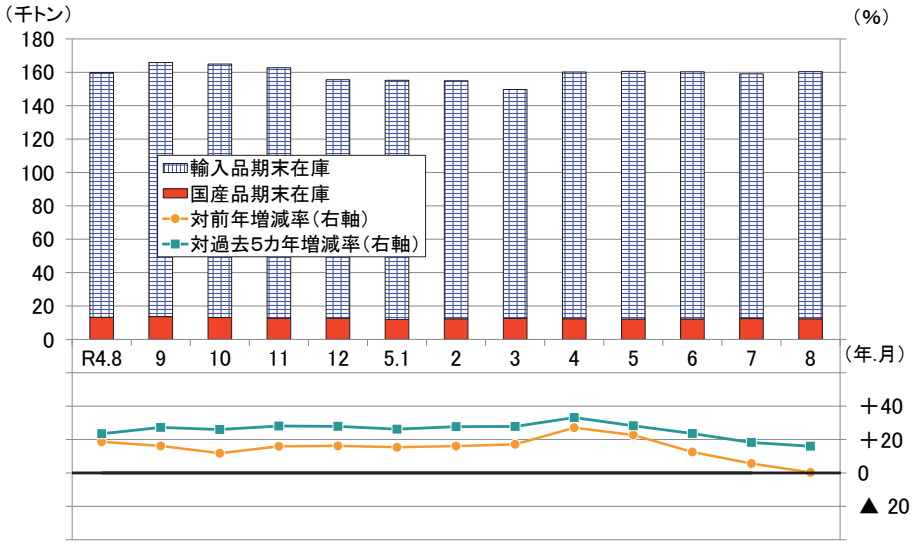
を含むファーストフードの和風は、定番メニューが堅調であったことに加え、深夜営業を再開する店舗もあったことなどから、同16.2%増と前年同月を大幅に上回った。ファミリーレストランの焼き肉は、夏休みで大学生などの若年層の集客もあったことなどから、同19.4%増と前年同月を大幅に上回った。

推定期末在庫・推定出回り量

８月の推定期末在庫は、16万381トン（同0.3%増）と前年同月並みとなった（図４）。このうち、輸入品は14万8038トン（同1.0%増）と前年同月をわずかに上回った。

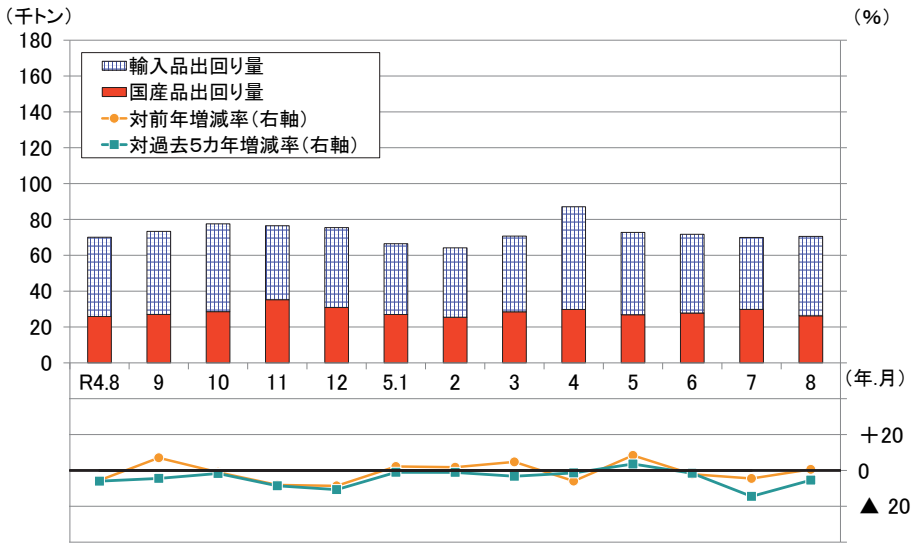
推定出回り量は、７万521トン（同0.6%増）と前年同月をわずかに上回った（図５）。このうち、国産品は２万6275トン（同1.5%増）

図４　牛肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図５　牛肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

と前年同月をわずかに上回った一方、輸入品は４万4246トン（同0.1％増）と前年同月並みとなった。

（畜産振興部　大内田　一弘）

豚　肉

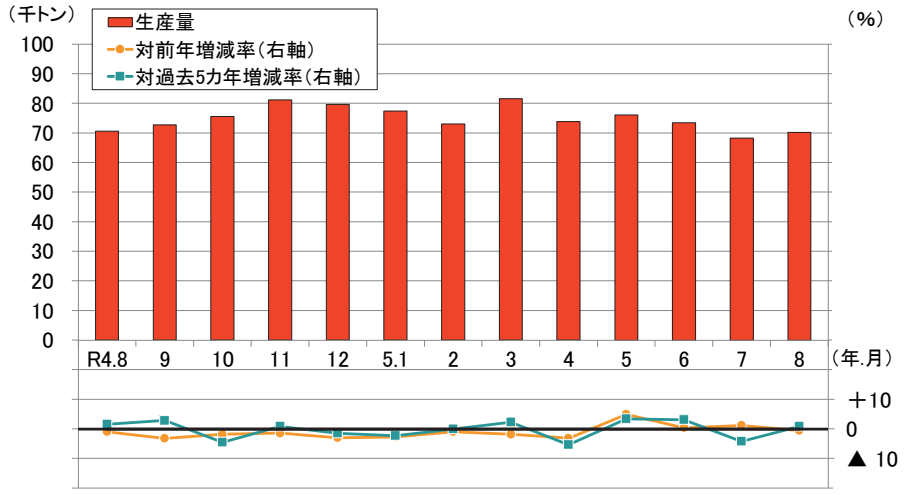
５年８月の豚肉生産量、前年同月比0.5％減

生産量

令和５年８月の豚肉生産量は、７万175トン（前年同月比0.5％減）と前年同月をわずかに下回った（図１）。

なお、過去５カ年の８月の平均生産量との比較では、0.9％増とわずかに上回る結果となった。

図１　豚肉生産量の推移



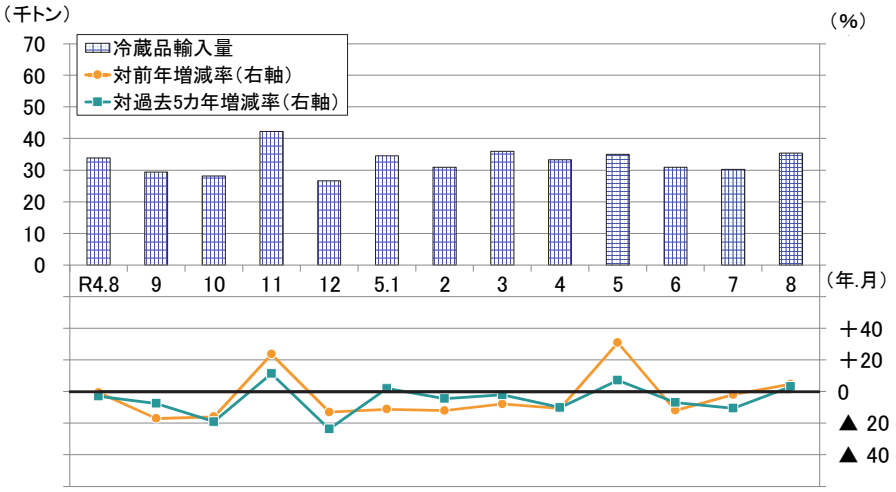
資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

輸入量

８月の輸入量は、冷蔵品は、カナダ産の前月分の通関がずれ込んだことなどから、３万5438トン（同4.7％増）と前年同月をやや上回った（図２）。冷凍品は、国内の輸入品在庫が多いことや欧州産の現地相場の高騰に加え、前年同月のスペイン産の輸入量が多かったことなどから、３万8414トン（同27.0％減）と前年同月を大幅に下回った（図３）。この結果、全体では７万3862トン（同14.6％減）と前年同月をかなり大きく下回った。

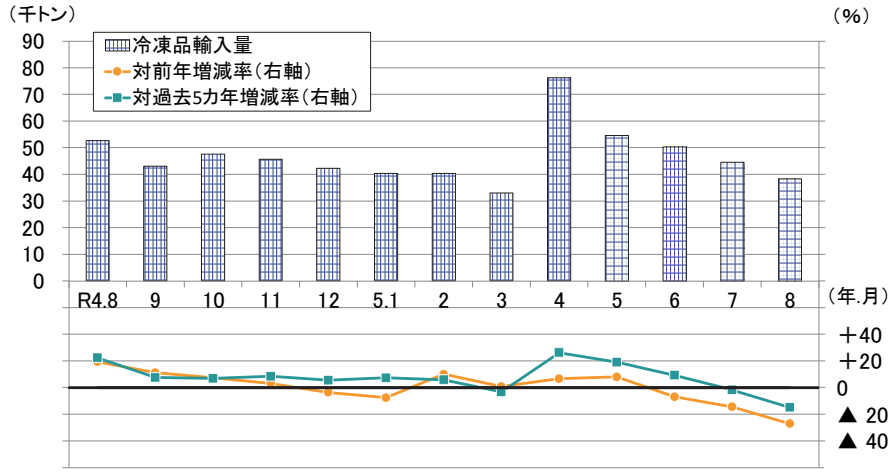
なお、過去５カ年の８月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は3.1％増とやや上回った一方、冷凍品は15.0％減とかなり大きく下回る結果となった。

図２　冷蔵豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

図３　冷凍豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

家計消費量

８月の豚肉の家計消費量（全国１人当たり）は、601グラム（同2.7%減）と前年同月をわずかに下回った（総務省「家計調査」）。

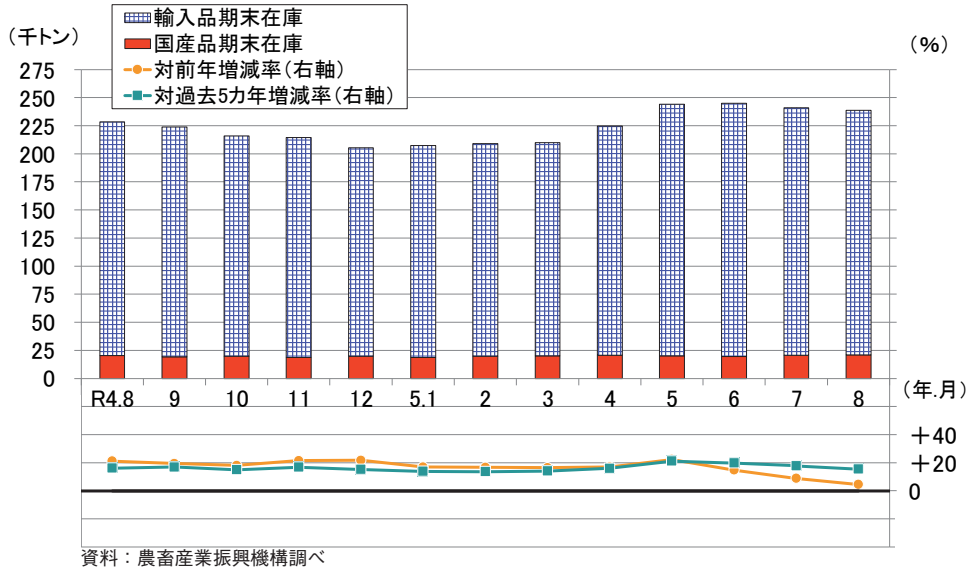
なお、過去５カ年の８月の平均消費量との比較では、0.1%増と同水準という結果となった。

推定期末在庫・推定出回り量

８月の推定期末在庫は、23万8736トン（4.6%増）と前年同月をやや上回った（図４）。このうち、輸入品は、21万7704トン（同4.7%増）と前年同月をやや上回った。

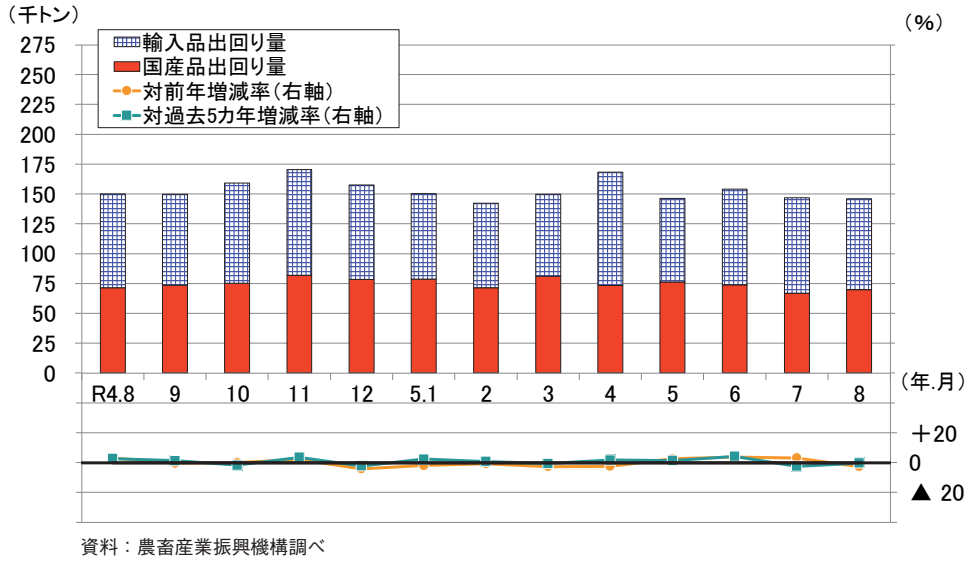
推定出回り量は14万6022トン（同2.6%減）と前年同月をわずかに下回った（図５）。このうち、国産品は６万9796トン（同2.2%減）とわずかに、輸入品は７万6225トン（同3.0%減）とやや、いずれも前年同月を下回った。

図４　豚肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図５　豚肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

（畜産振興部　大西　未来）

鶏　肉

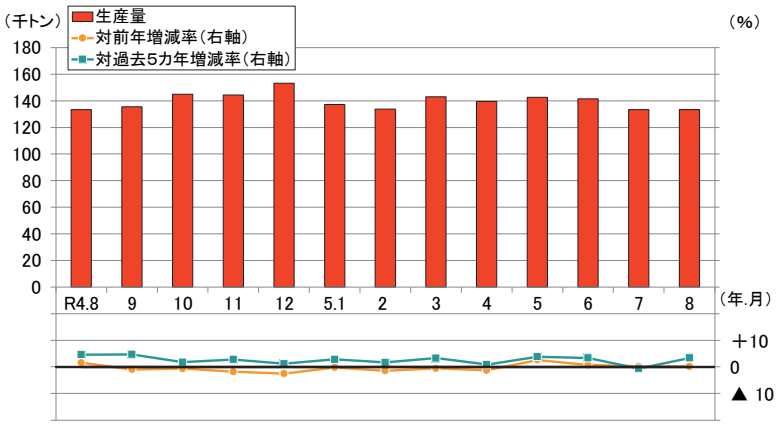
５年８月の鶏肉生産量、前年同月比0.1％増

生産量

令和５年８月の鶏肉生産量は、13万3512トン（前年同月比0.1％増）と前年同月並みとなった（図１）。

なお、過去５カ年の８月の平均生産量との比較では、3.4％増とやや上回る結果となった。

図１　鶏肉生産量の推移



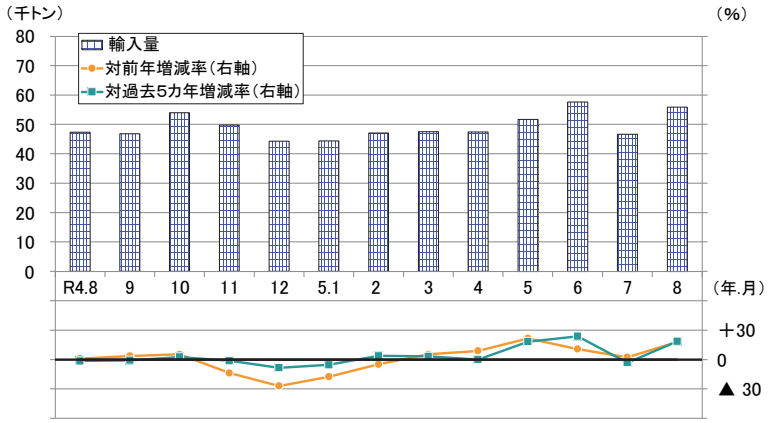
資料：農畜産業振興機構調べ
注１：骨付き肉ベース。
注２：成鶏肉を含む。

輸入量

８月の輸入量は、国内での安定的な消費に加え、ブラジルでの高病原性鳥インフルエンザ発生を懸念した供給不安などから買い付けが増加し、５万5955トン（同18.1％増）と前年同月を大幅に上回った（図２）。

なお、過去５カ年の８月の平均輸入量との比較でも、18.6％増と大幅に上回る結果となった。

図２　鶏肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：鶏肉以外の家きん肉を含まない。

家計消費量

８月の鶏肉の家計消費量（全国１人当たり）は、472グラム（同0.0％増）と前年同月並みとなった（総務省「家計調査」）。

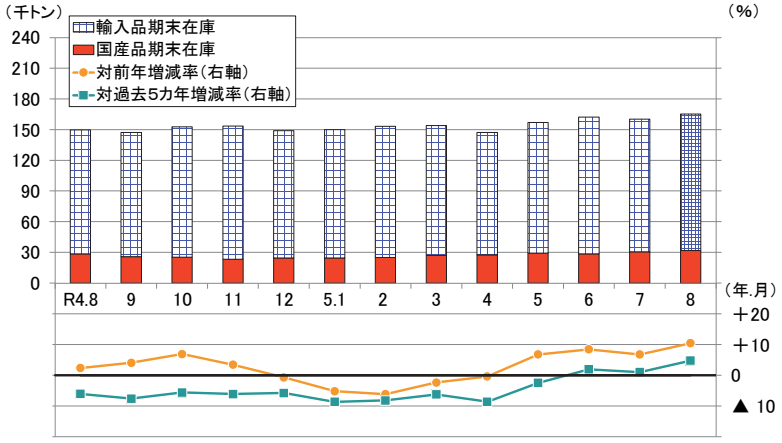
なお、過去５カ年の８月の平均消費量との比較では、1.8％増とわずかに上回る結果となった。

推定期末在庫・推定出回り量

８月の推定期末在庫は、16万5332トン（同10.4％増）と前年同月をかなりの程度上回った（図３）。このうち、輸入品は13万3334トン（同10.0％増）と前年同月をかなりの程度上回った。

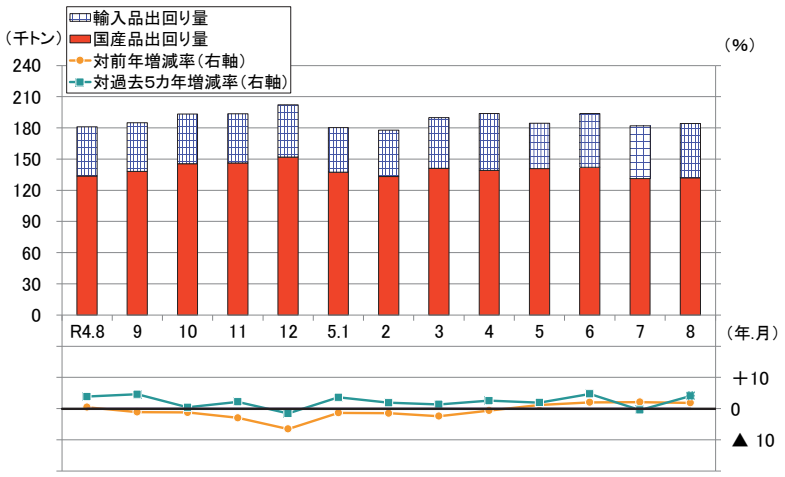
推定出回り量は、18万4352トン（同1.9％増）と前年同月をわずかに上回った（図４）。このうち、国産品は13万2118トン（同1.2％減）と前年同月をわずかに下回った一方、輸入品は５万2234トン（同10.5％増）と前年同月をかなりの程度上回った。

図３　鶏肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図４　鶏肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

（畜産振興部　田中　美宇）

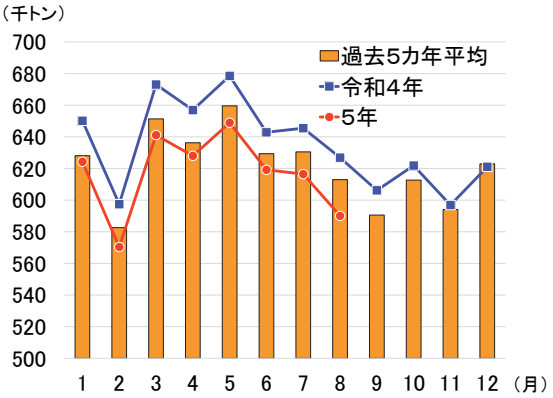
牛乳・乳製品

８月の生乳生産量、前年同月比5.9％減

８月の北海道の生乳生産量、前年同月比5.8％減

令和５年８月の生乳生産量は、59万63トン（前年同月比5.9％減）と前年同月をやや下回り、13カ月連続で前年同月を下回った（図１）。地域別に見ると、北海道は34万2917トン（同5.8％減）、都府県は24万7146トン（同5.9％減）といずれも前年同月をやや下回った。北海道は12カ月、都府県は13カ月連続でそれぞれ前年同月を下回った。これは生産抑制に加え、今夏の猛暑の影響などによるものとみられる。

図１　生乳生産量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

８月の生乳処理量を用途別に見ると、牛乳等向けは、31万6211トン（同4.4％減）と前年同月をやや下回った。このうち、業務用向けについては、２万3773トン（同13.5％減）と前年同月をかなり大きく下回った。

乳製品向けは、26万9924トン（同7.6％減）と前年同月をかなりの程度下回り、13カ月連続で前年同月を下回った。これを品目別に見ると、クリーム向けは、５万7111トン（同0.2％減）と前年同月並みとなり、チーズ向けは、３万6826トン（同5.8％減）と前年同月をやや下回った。脱脂粉乳・バター等向けは、12万8450トン（同13.1％減）と前年同月をかなり大きく下回った（農畜産業振興機構「交付対象事業者別の販売生乳数量等」）。

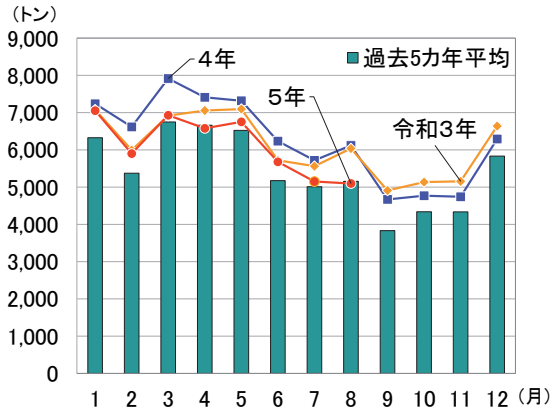
８月の牛乳等の生産量を見ると、飲用牛乳等のうち、牛乳は24万8882キロリットル（同4.8％減）と前年同月をやや下回り、成分調整牛乳は２万1336キロリットル（同5.1％減）と前年同月をやや下回った。加工乳は、１万1385キロリットル（同4.7％増）と前年同月をやや上回った。

乳製品のうち、クリームは9093トン（同1.3％減）と前年同月をわずかに下回った。

８月末のバター在庫量、前年同月比31.3％減

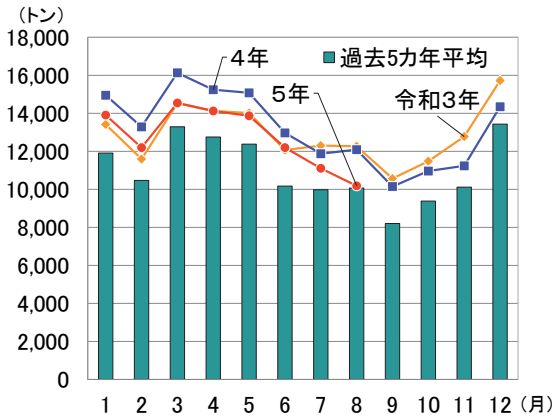
８月のバターの生産量は、5097トン（前年同月比16.7％減）と前年同月を大幅に下回り、12カ月連続で前年同月を下回った（図２）。出回り量は6806トン（同2.3％減）と前年同月をわずかに下回った。８月末の在庫量は、２万8123トン（同31.3％減）と前年同月を大幅に下回り、16カ月連続で前年同月を下回った（図３）。

図２　バターの生産量の推移



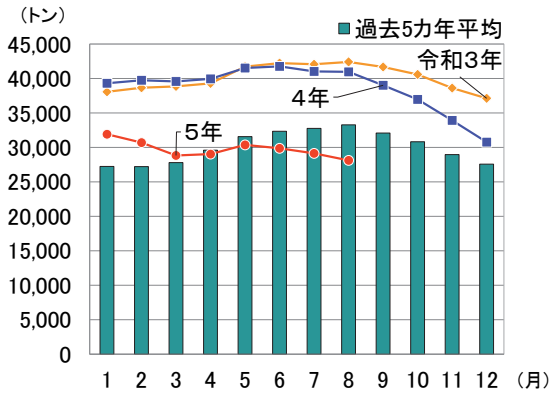
資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

図４　脱脂粉乳の生産量の推移



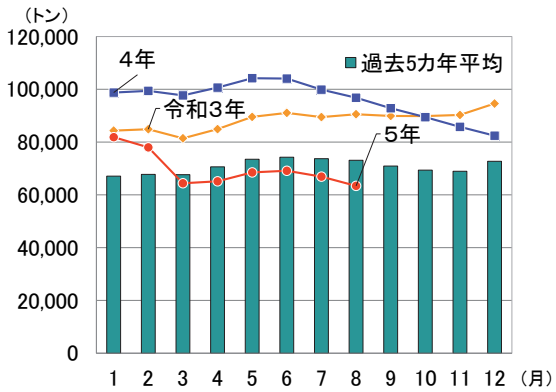
資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

図３　バターの在庫量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

図５　脱脂粉乳の在庫量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

８月末の脱脂粉乳在庫量、前年同月比34.5％減

８月の脱脂粉乳の生産量は、１万185トン（前年同月比15.7％減）と前年同月をかなり大きく下回った（図４）。出回り量は１万3687トン（同9.9％減）と前年同月をかなりの程度下回った（農畜産業振興機構調べ）。８月末の在庫量は、６万3410トン（同34.5％減）と11カ月連続で前年同月を下回った（図５）。

輸入枠数量、５月の検証に続き据え置き

農林水産省は令和５年９月29日、５年度の国家貿易による指定乳製品等の輸入枠数量の検証結果を公表した。これによるとバターおよび脱脂粉乳の在庫量は、適正な在庫水準を上回ることから、本年度の輸入枠数量（生乳換算で13万7202トン）は据え置くものの、事業者の要望などを踏まえ、同年度におけるホエイおよびバターオイルの入札落札数量をバターに振り替え、当初の8000トンから１万320トンに設定することとした。また、脱脂粉乳については750トンに据え置くこととした。当機構は、今回の検証結果を踏まえ、引き続きバター等の入札を実施する予定である。

（酪農乳業部　髙橋　沙織）

鶏　卵

９月の鶏卵卸売価格、再び上昇傾向に

令和５年９月の鶏卵卸売価格（東京、Ｍ玉基準値）は、１キログラム当たり292円（前年同月差69円高）と13カ月連続で前年同月を上回った（図１）。前月は７カ月ぶりに300円の大台を割って282円となったが、９月の同価格は前月を10円上回り、前月比103.5%とやや上昇した。

鶏卵相場は、例年、低需要期の夏場に下落し、気温の低下とともに最需要期の12月に向けて上昇する傾向がある。本年も夏場の鶏卵相場は下落傾向で推移したものの、９月後半まで続いた記録的な猛暑により産卵率の低下や小玉率の増加が見られ、高病原性鳥インフルエンザ（以下「HPAI」という）の記録的な発生により減少していた鶏卵の供給は再導入の進展により段階的に回復しているものの、同価格は引き続き、高値で推移している。

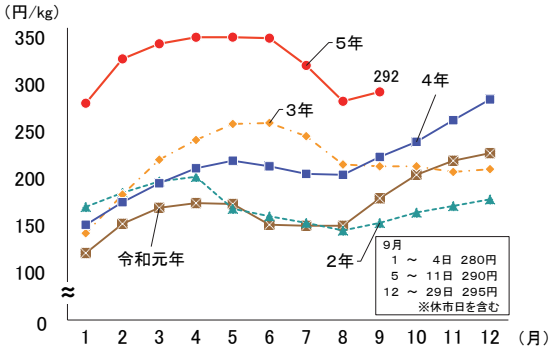
日ごとの同価格の推移を見ると、月初の同280円から12日には同295円まで上昇し、同価格は月末まで続いた。この上昇は、大手外食チェーンの卵メニューの提供再開やコンビニ、学校給食での提供が増加したことなどによるものとみられる。

今後の供給量については、ようやく暑さが落ち着き、涼しい気候になることから産卵に適した時期を迎え、卵重の増加や産卵率の上昇が見込まれる。

なお、え付けしたひなが産卵を開始するのは約５カ月齢とされるが、鶏卵供給量に影響を与える採卵用めすの出荷・え付け羽数は、一般社団法人日本種鶏孵卵協会によると、５年８月は841万3000羽（前年同月比2.5%増）と前年同月をわずかに上回った（図２）。５年１～８月を見ると6796万2000羽（前年同期比2.0%増）と前年同期をわずかに上回っており、今後の同羽数やHPAIで影響を受けた生産量の回復の動向が注目される。

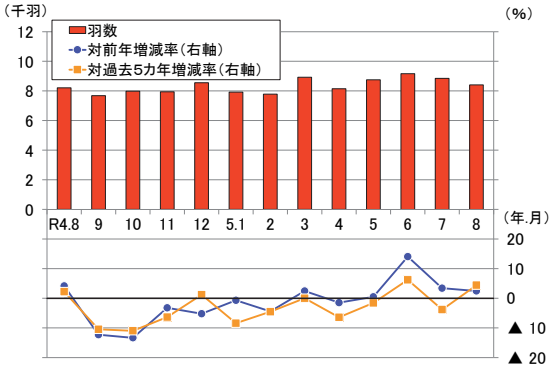
需要面は、人流の回復が進み、増加傾向にあるインバウンド需要や秋の旅行シーズンによる外食、観光分野での消費拡大が期待され

図１　鶏卵卸売価格（東京、Ｍ玉）の推移



資料：JA全農たまご株式会社「相場情報」
注：消費税を含まない。

図２　採卵用めすひなえ付け羽数の推移



資料：一般社団法人日本種鶏孵卵協会「鶏ひなふ化羽数」
注：報告羽数の集計値であり、全国の推計値ではない。

る。また、おでんなどの季節需要や、年末に向けての業務・加工用の需要も見込まれる。

（畜産振興部　生駒　千賀子）

令和４年「農業物価指数」について

農林水産省が令和５年７月28日に公表した「令和４年農業物価指数―令和２年基準―」について、概要を以下の通り報告する。

農業物価指数とは、農業における投入・産出の物価変動を表すもので、農産物価格指数と農業生産資材価格指数を用いて作成されている。農産物価格指数は、農家が販売する農産物の生産者価格に関する指数であり、農業生産資材価格指数は農家が購入する農業生産資材価格に関する指数である。なお、これらすべての指数は、基準年の令和２年を100とした数値となっている。

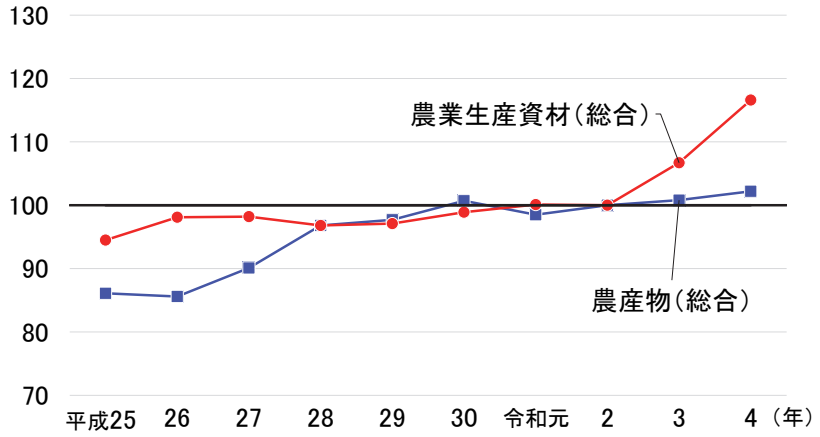
４年については、農産物価格指数（総合価格指数（以下「総合」という））は米などの価格は低下したものの、野菜などの価格が上昇したことにより前年から1.4%上昇の102.2となった（図１）。一方、農業生産資材価格指数（総合）は飼料、肥料などの価格が上昇したことにより、前年から9.3%上昇の116.6となった。過去10年間の推移を見ると、いずれも上昇傾向にあり、農産物価格指数（総合）、農業生産資材価格指数（総合）ともに、基準年の２年以降、100を上回って推移し、その中でも農業生産資材価格指数（総合）の上昇傾向の方が強く、３年の両指数の差は5.9ポイントであったが、４年は14.4ポイントとなった。

【農産物価格指数】畜産物は前年並み

畜産物の農産物価格指数（注１）を見ると、４年は、鶏卵の価格は高病原性鳥インフルエンザ（以下「HPAI」という）の記録的な発生の影響により大幅に上昇した一方、子牛の価格が低下したことなどから、前年並みの前年比0.3%低下の105.3となった（図２）。

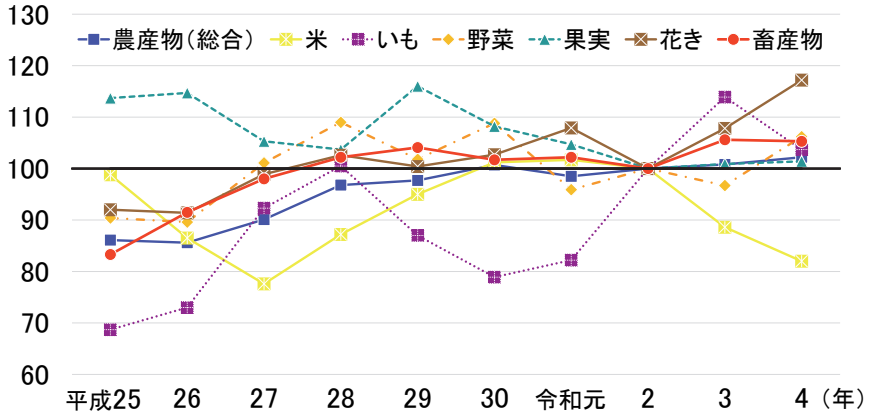
（注１）農産物価格指数（総合）の算出に用いる類別のウエートは、全体を100とした場合、米は15.72、いもは2.74、野菜は24.64、果実は9.66、花きは3.52、畜産物は39.05などとなっている。

図１　農産物（総合）および農業生産資材（総合）の年次別価格指数の推移



資料：農林水産省「農業物価指数」
注：令和２年＝100とする指数。

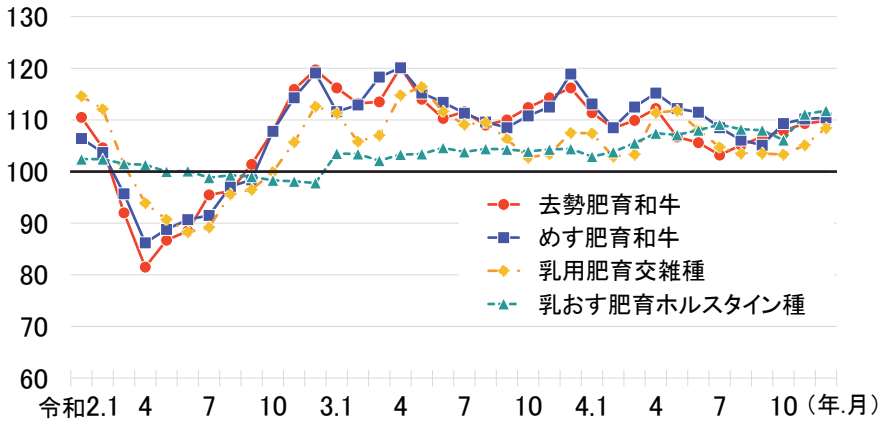
図２　主な農産物の類別・年次別価格指数の推移



資料：農林水産省「農業物価指数」
注：令和２年＝100とする指数。

畜産物のうち肉用牛を見ると、２年は、新型コロナウイルス感染症（COVID－19）の影響により品種によっては100を大幅に下回る時期も散見されたものの、３年以降は、経済活動の再開や輸出の回復などによりすべての月で100を上回るなど高い水準で推移した（図３）。４年は、前年比について年平均で見ると、上昇率が最大であったのは乳おす肥育ホルスタイン種で同3.4％上昇の107.3であった一方、下落率が最大であったのは去勢肥育和牛で同4.8％低下の108.0であった。

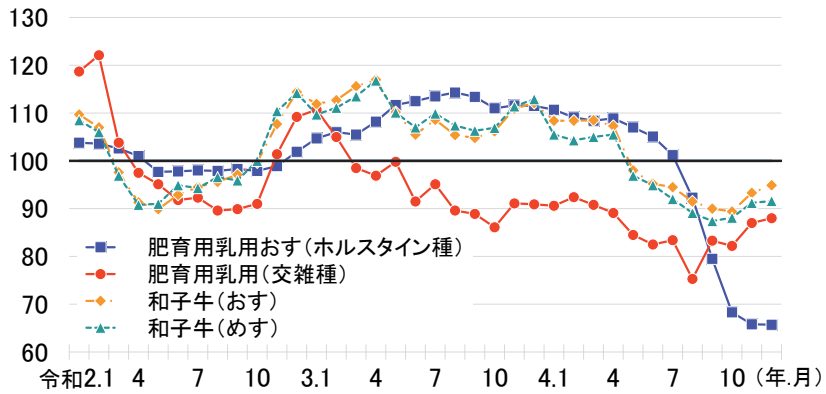
図３　肉用牛（肉畜）の月別価格指数の推移



資料：農林水産省「農業物価指数」
注：令和２年平均＝100とする指数。

肥育用乳子牛および和子牛を見ると、４年は、全品種で下落となった（図４）。前年比について年平均で見ると、下落率が最大であったのは肥育用乳用おす（ホルスタイン種）で、４年５月より低下が継続し、同13.8％低下の95.0であった。

図４　肥育用乳子牛および和子牛の月別価格指数の推移



資料：農林水産省「農業物価指数」
注：令和２年平均＝100とする指数。

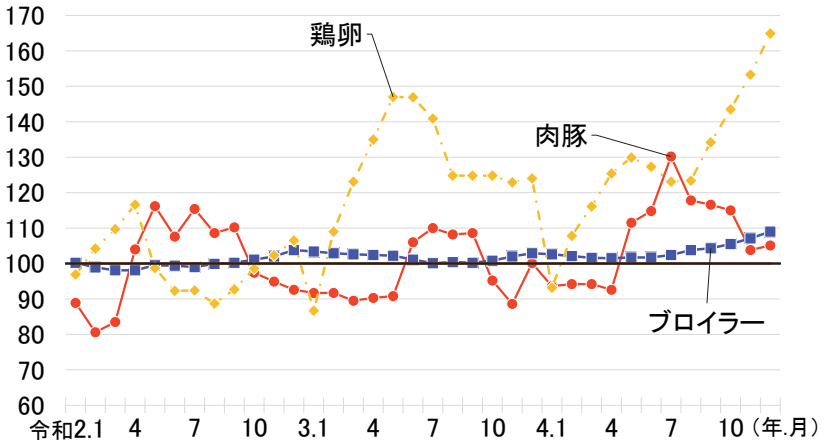
肉豚を見ると、高騰している輸入豚肉の影響もあり、国産豚肉の需要が高まったことなどから、４年は、年平均で同10.1％上昇の107.5となった（図５）。

ブロイラーを見ると、飼料価格の上昇に加え、もも肉の需要が安定的に推移していることや、むね肉は価格が高水準となっている輸入鶏肉の代替としての需要が増加したことなどから、価格は例年を上回る水準で推移し、４年は、年平均で同1.9％上昇の103.6となった。

鶏卵を見ると、業務用需要が回復傾向にあることや生産コストの上昇などから、価格が例年を上回る水準で推移する中、10月以降に発生したHPAIにより、採卵鶏の殺処分が飼養羽数の１割強に上ったことで価格がさらに大幅な高値で推移し、４年は、年平均で同2.2％上昇の128.7となった。

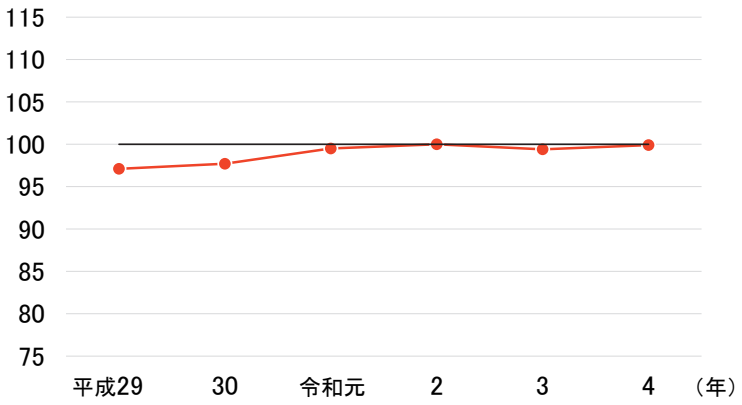
生乳の指数は昨年から0.5ポイント上昇し、99.9となった（図６）。４年11月に飲用乳価の値上げが行われたことから同月では104.6と前年同月から4.2ポイント上昇しているが、年平均で見ると２～４年にかけておおむね横ばいで推移している。

図５　肉豚、ブロイラー、鶏卵の月別価格指数の推移



資料：農林水産省「農業物価指数」
注：令和２年平均＝100とする指数。

図６　生乳の年次別価格指数の推移



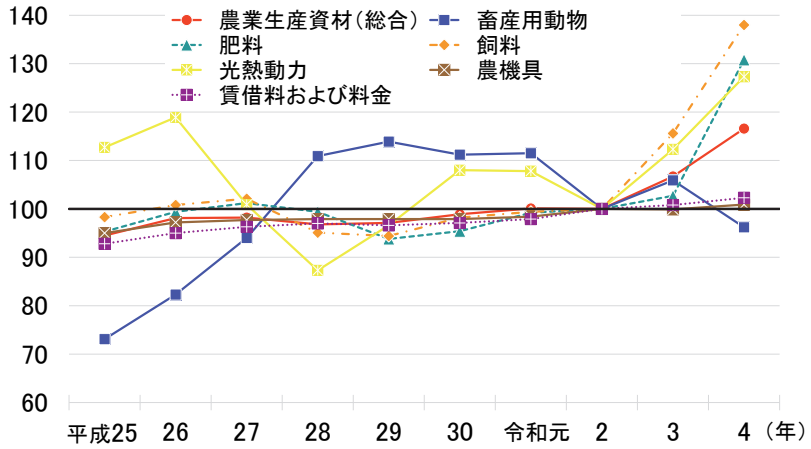
資料：農林水産省「農業物価指数」
注：令和２年＝100とする指数。

【農業生産資材価格指数】飼料、肥料、光熱動力などが大幅に上昇

農業生産資材価格指数（総合）(注2)を見ると、４年２月のロシアによるウクライナ侵攻などの影響により、飼料、肥料、光熱電力などあらゆる農業生産資材価格が大幅に上昇したことから、前年比9.3％上昇の116.6となった（図７）。

（注２）農業生産資材価格指数（総合）の算出に用いる類別のウエートは、全体を100とした場合、畜産用動物は11.31、肥料は7.76、飼料は22.96、光熱動力は8.50、農機具は13.26、賃借料および料金は6.27などとなっている。

図７　主な農業生産資材の類別・年次別価格指数の推移



資料：農林水産省「農業物価指数」
注：令和２年＝100とする指数。

配合飼料は、主な原料であるトウモロコシの国際価格が４年２月のロシアによるウクライナ侵攻や円安ドル高の傾向の為替相場の影響を大きく受けて上昇を続けており、４年は、年平均で同19.0％上昇と前年を大幅に上回り、138.5となった（図８）。

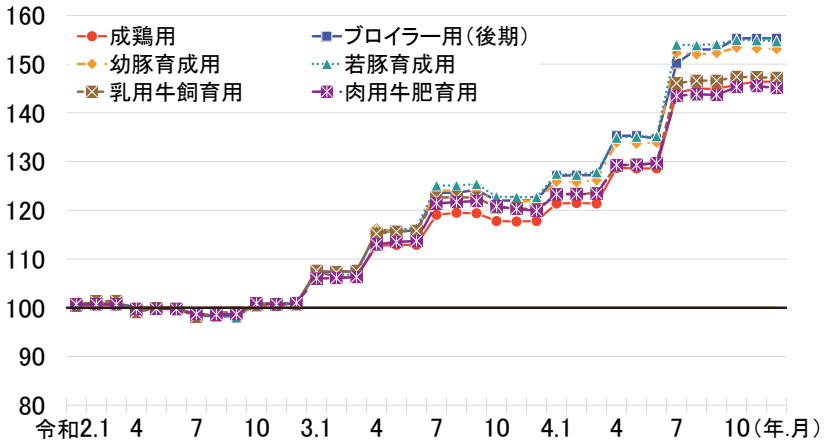
品目別に見ると、成鶏用は同18.4％上昇の135.2、ブロイラー用（後期）は同21.5％上昇の142.4、幼豚育成用は同20.7％上昇の141.3、若豚育成用は同21.4％上昇の

142.9、乳用牛飼育用は同17.3％上昇の136.6、肉用牛肥育用は同17.3％上昇の135.4と、いずれも大幅に上昇した。

なお、経営コストに占める飼料費の割合は高く、３年では、繁殖牛（子牛生産）は42％、肥育牛は34％、肥育豚は63％、ブロイラー経営は57％、生乳は北海道で43％、都府県で50％、採卵経営は48％となっている[注３]。

（注３）資料：農林水産省「飼料をめぐる情勢（令和５年９月）」繁殖牛（子牛生産）は子牛１頭当たり、肥育牛および肥育豚は１頭当たり、生乳は生乳100キログラム（乳脂肪分3.5％換算乳量）当たり、養鶏（ブロイラー経営、採卵経営）は１経営体当たり。

図８　配合飼料の月別価格指数の推移



資料：農林水産省「農業物価指数」
注：令和２年平均＝ 100とする指数。

（畜産振興部　大内田　一弘、酪農乳業部　髙橋　沙織）